シグマザース・ディザース

亜地人

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

様々な生物討伐依頼を受ける地　〝ギルダーム〟　そこで最強（シグマ）と言われる二人がいた。これはそんな彼らの物語である。

ｓｓ初心者です。宜しくお願いします。

本文を見て思うことは、とにかく文が変ですｗｗｗ

読んでくださる方がいれば幸いです。

目次

プロローグ ―― 1
第一章
因縁の過去へ I ―― 6

プロローグ

プロローグ

俺には、憧れの人がいた……　筈だ。
そんなことを考えながら、また討伐の依頼書を見ている

空気がおいしく、自然も豊か。
生物も多数生息する森が奥手に見える場所。
人は此処を　〝ギルダーム〟　と呼ぶ。
しかし、人は誰一人住んでいない。正確には［ギルダーム集会所］という。
ある時は獰猛な獣　龍を。またある時は此処とは違う発展都市に現れる機械生物を

狩るという依頼を受ける場所である。その依頼を受けに来る人々を　狩人（ハンター）と呼ぶ。

今日もギルダームは沢山のハンターたちで賑わっている。そんな中に、ある青年二人がいた。

「しょうもねぇ依頼なら俺はヤらねぇぞ」

「ガタガタ言ってねぇで、さっさとヤッちまうぞ」

「ホイホイ」

アルティア・ファランシスタ

十七歳。面倒なことがとにかく嫌いな青年。背中には、[海滅剣カルナヴァル]という大剣を背負っている。

ディルムッド・フォレスティア

アルティアと同じく十七歳。何事にも冷静な青年。背中には、父親から受け継いだ黒と赤が特徴的な槍「真斬剣エグニール」を背負っている。

二人はとにかく喧嘩が多い。あまり広くないギルダーム内でも、互いの自慢の武器で決闘し始めるほど。

だが、一度狩りに行くとなると……。
一人はその場にあった冷静な判断をくだし、もう一人はその判断を確実に聴取し、狩りを進めていく。
そして最後は残った二人の力を出しきって……。

〝ぶった斬る!!〟

ギルダーム内では、二人を　〝最強〟（シグマ）と呼ぶ。
どんなに狩り経験豊富なハンターでも、ましてやその集団でも、
功名を持つ者も、自身を機械に改造した者も、
とにかくどんな誰であろうと、一つ言えることは……。

〝彼らには敵わない〟

「そんで、今日はどんな依頼なんだ?フォレス」

「あのだだっ広い平原に何かいるんだってよ。そいつを狩ってこいって」

「なにその不確定要素満載の依頼ッ！」

「まぁ待てよ。何かスゴいデカイらしいぞ。そいつ」

「なん、だと？」

「噂によると、地中を泳ぐ烏賊（イカ）か蛸（タコ）らしいぞ」

「食えるか？そいつ」

「く、食えるんじゃねぇのか？ていうか、なんで食うことしか考えてねぇんだよ!!」

「よし、行く!!」

「お前食いもんなら動くんだな」

「当ったり前だ」

「そんなことより、狩猟騎士団からのスカウトの件。お前はどうすんだ?アルティア」

「ディルは?」

「もちろん、パス」

「だよな、俺もパス」

彼らはいつでも自由を優先する。誰かの下につくということは、一切しない。

「で、受けるんだな?今日の依頼」

「あぁ」

彼らは依頼を受け、平原へ歩いていった。

第一章
因縁の過去へ　Ⅰ

一歩一歩前へ行くたび、人には試練が待っている。
怒り、憎しみ、苦しみ、悲しみ、楽しみという試練。是等全てを経験し、学び、己を高めていく。
人は是を『成長』と言う。
しかし彼らには、それが……　できなかった。

ー翌日の朝ー

二人はようやく平原に着いた。

足が全く動かなくなるほど疲れていた。

「ひとまず、休憩にするぞ」

木陰で休憩することにした。

二人が来たのは、ギルダームから東に約三〇キロメートル行った所に位置する地「ハーザルト平原」

草木は生い茂り、川の水は川底がくっきり見えるほど澄みきっている。極稀にだが、珍しい鉱石も取れるらしい。

多種多様な生物が生息するこの地で、二人はある生物の撃退を依頼された。

ー　崩極龍　　ネザドベルスー

地を泳ぎ、見た目は巨大な烏賊（いか）のような龍。　その生態は未だ謎が多く、数多の研究者たちが捕獲しようとするが、皆無惨に散っていったという。そんな龍が、こんなだだっ広い平原にいるという。

しかし、

そこには、もう姿は無くなっていた。

それもそのはずだ。　何せこの依頼を受けてから既に一日経っている。姿が無いのも当然のことだ。

「来た意味ねぇじゃねぇか‼?」

アルティアはキレた。

「消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消消」

ディルはコワレた。

二人は同じことを考えた。
ーこれじゃ変われないー
これじゃまるで、、、、、
《あの日》と同じじゃないか、と

ー10年前ー

その日はこれまでにないほど、晴れていた。
二人の無邪気な少年がいた。とても仲が良い友達だった。暇があれば、何処にでも行こうとするやんちゃな二人。

「ディル　何して遊ぶ?」

「どっか行こう!!?」

相変わらずの二人だった。そんな二人には、一人ずつ、兄がいる。

「アルティア、　　また出かけるのか?あまり遅くなるなよ」

「ディルムッド　、　今日は何処に行く気だ?　」

アルティアの兄　　ギルス・ファランシスタ
ディルムッドの兄　　ベルジャック・フォレスティア
二人もまた仲が良かった。

どちらの家も、両親を早くに亡くしている。だが、生活は安定していた。二人は　狩人（ハンター）だった。それも名の知れた一流ハンターだった。依頼を受け、達成すれば、報酬金を貰うことができる。ある意味いい職場だった。　　二人は　何時しか、　〝無敗〟（カルトロシア）　　と呼ばれるようになっていた。

「ギル兄‼?　　うん、早めには帰るようにする‼?」
「ベル兄さん恐いよ　　あんまり遠く行かないからさぁ」

そう言うと二人は駆け出して行った。行く場所は決まっていた。

ー　憧れの人のもとへ